
放課後は召喚獣（仮）

ししだ じょうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後は召喚獣（仮）

【Nコード】

N9636U

【作者名】

ししだ じょうた

【あらすじ】

異世界に普通の（とは言えない）高校生が召喚される。魔法があったり、魔物がいたり、自分の世界とは一味も二味も違う世界に驚きつつも次第に異世界にも慣れていく。しかし、召喚されたのに何も起きないはずがない。貴族の反乱、魔物の増加と湧き上がるように続くトラブルに主人公はてんてこ舞い。全3部作（予定）の恋あり、ギャグあり？、涙あ……り？の一大スペクタクルラブロマンスミステリーサスペンスうんちゃらかんちゃらストーリー（なんだそら）の第1部です。

無期限更新凍結中です

0-0 気を失うことを寝るとは言わない

――――け――――

――す――け――――

――たす――け――――

――――たすけて――――

目を開けばよく見なれた天井が視界に広がる。オーケー、今日の目覚めも最悪だ。

最近繰り返し見て見る夢。ただ、少女の声が聞こえてくるだけで映像は一切なく、ただ暗闇の中にいるそんな夢だ。

起きると妙に頭が痛いし、眠っていたはずなのに妙に疲れている。変な病気にでもかかっているんだろうか？

まったく、どうにかしてほしい。

ため息をつきながら体を起こすといつも通りの自分の部屋が目に入る。小学校の時から使い続けている机、いくらかの小説と漫画が収められた本棚。年頃の部屋らしくグラビアのポスターでも貼ったほうがいいんだろうか？

「誠司、朝よく起きなさい」

階下から聞こえてくる母親の声に反応してベッドから出ると寝巻代わりの部屋着を脱いでさっさと制服に着替える。

どこにでもあるようなデザインのブレザーは特に可もなく不可もなくといった着心地でしかない。まったくもって、女子は制服のかわいさとやらを気にするらしいが、男の制服にかっこいいとかはあるのだろうか？

なんだか、朝から疑問ばかりが頭をよぎる。何事も考えてばかりいてもしょうがない。

制服に袖を通したら、最後にネクタイを締めて部屋を出る。

「……ふあ」

やっぱり眠い。

あくびを噛み殺しながら俺は部屋を出た。

「ああ、眠い」

眠い目をこすりながら御堂誠司は学校へと続く坂道をのんびりと登っていく。

周囲には同じように気だるげな様子の生徒たちが重い足取りで歩いている。ただでさえ眠い朝、しかも今日は月曜日だ。これから五日間もこのように長い坂道を登るかと思うと余計に気が重くなる。しかしそれでも高校生。勉強するのが仕事だと言われているわけで学校に行かないわけにもいかない。

根は結構まじめな誠司は今日もまた、心臓破りとまで言われる長

く傾斜のきつい坂を登るわけだ。

「おーっす、おはようマコっち」

不意に背中を叩かれ誠司は足を止めた。声のほうに顔を向ければそこにいたのはクラスメイトの矢沢邦彦が笑みを浮かべながら立っていた。

邦彦は誠司と比べなくても劣等生だ。髪は茶に染められ、右の耳には校則違反のピアス。学校に来ても大概寝ているか、授業の途中で教室を出て行くような生徒で、教師の大部分が不良というレッテルを貼っている。

しかし、人付き合いはよく、気配りもできる。クラスメイトからすると良いムードメーカーと言ったところだろう。

「おはよう、クニ。今日も朝から元気だな」

「はっはっは、いつでもどこでもハイテンションが俺のいいところだからな」

この邦彦は、誠司とは幼馴染と言う間柄でお互いをあだ名で呼びあっている。成績上位で教師からの受けもいい誠司と劣等生の邦彦。性格は相反するものだが、妙に馬が合い周囲からも不思議がられるほど仲が良い。この二人が喧嘩をしているところは誰も見たことがないほどだ。

「今日もマコっちはテンション低いけどまたあの夢見たのか？」

「ん？ ああ、そうだな」

「夢なんて深層心理がどうたらってやつだろ？ 助けてって声が聞こえるのはなにか心配事があるんじゃないのか？」

あるなら相談に乗る。そう言ったニュアンスを含めて邦彦は誠司

の目を見た。

付き合いが長い誠司にとって邦彦はどんなことでも相談できる間柄だ。恋の悩みだろうと恥ずかしい相談だろうとなんだって話すことはできる。冗談を言えば茶化すこともあるが、本気で言ったことを言いふらしたりしないことはよく知っている。

「それがないのに、こんな夢見るから困ってるんだよ」

誠司は肩を落としておどけて見せた。邦彦もそんな誠司を見て嘘ではないだろうと笑みを浮かべる。

「じゃあ、自分でも気づかない何かがあるんだろ。俺が当ててやろう。それはずばり恋の悩みだ！」

「いや、それはない」

「即答かよ！」

互いに笑みを浮かべながら足は学園に向けて動き出す。周囲の学生たちも談笑しながら歩いている姿が目立ってきた。

「にしても、何もこんな坂の上に学校立てることもないだろに。お偉いさんは何を考えてるんだか」

「その話何度目だよ。毎日のようにそんな愚痴言ってるけど、いまさはどうしようもないだろ」

「だって、毎朝こんな坂登るの疲れんじゃないん」

「だったら、違う学校にすれば良かっただろ」

「そんな、お前は俺と別れたいって言うのか！？あの夜のことは遊びだったんだな」

「意味わかんないし」

そんな他愛もない話をしていると気づけば校門が見えてくる。始

業時間には余裕があるので走る必要もないだろう。

「げっ！」

「ん、どうした？」

校門を見て足を止める邦彦。それにつられて誠司もまた足を止めた。

邦彦の視線の先、校門のあたりには幾人かの生徒が立っており、他の生徒たちを呼びとめては何かをやっている。

遠目には分かりづらいがどうやら風紀委員の持ち物検査か何かのようだ。

「誠司、悪いな。俺は忘れ物したから一旦戻る」

「ちょ、おい！そんなことしてたら遅刻するぞ」

「いまさら、遅刻の一回や二回じゃ俺の成績には影響しない。じゃあな！」

誠司が止める暇もないうちに邦彦は坂を走って下って行った。どうやら、風紀委員に見られたらまずいものでも持っていたようだ。そんな邦彦の後姿を見送った誠司はあきれたようにため息をひとつついて再び歩き出す。

邦彦と違い見られて困るようなものを持っていない誠司はなんの後ろめたさもなく持ち物検査をしている風紀委員がいる校門にさしかかる。

「風紀委員です。持ち物検査をするので、荷物を見せてください。」

誠司を呼び止めたのは風紀と刺繍された腕章をつけている女子生徒だった。肩にかかる程度の長さにそろえられた髪は当然のことながらまったく違反のない黒い色。銀縁のいかにもといった眼鏡をか

けた彼女に誠司は見覚えがあった。

「美潮さん、おはよう」

「え？ ああ、御堂君じゃない。おはよう」

銀縁眼鏡の風紀委員、霧生美潮は誠司に挨拶をしながら屈託のない笑みを浮かべた。彼女は誠司の一つ上の学年だが、邦彦とはまた違った幼馴染だった。

中学校まで通っていた道場の一人娘で、昔からよく稽古をつけてもらっていた。道場を辞めてからは疎遠になっていたが、去年誠司が同じ学園に進学してからは以前と同じように会話をするようになった。

「今日は、矢沢は一緒じゃないの？」

「さっきまで一緒にいましたけど、校門前に風紀委員がいるのを見たら逃げ出しました」

学校を代表する不良学生である邦彦も当然のことながら美潮と面識がある。当たり前だが、誠司のように好意的な交流があるのではなく、不良学生として目をつけられているだけではあるが

「まったく、また変なもの持ち込む気だったのかしら？」

「そうだと思いますよ。何も持ってないんだったら、風紀委員がいたって逃げる奴じゃないですし」

「今度から、校門から見えない場所でやることにするわ」

「そうですね、それが賢明だと思いますよ」

世間話をしながらも手早く荷物に目を通した美潮はにっこりと笑って荷物を誠司に返した。

「はい、オッケーです」

「どうも」

「あ、ちょっと」

荷物を受け取った誠司はそのまま美潮の横を通り過ぎようとしたが、美潮に声をかけられて足を止めた。

振り返ると若干頬を染めた美潮がもじもじとしている。

「あの……もう道場には戻ってこないの？」

「何度も言ってますけど、空手はもうやるつもりはありません。いろいろ、忙しいので」

誠司はきっぱりと言い切ると背を向けてさっさと昇降口へと向かって行った。残された美潮は肩を落としてため息をつく。

その顔にはありありと落胆の色が浮かんでおり、彼女の周りの空気がどんよりとしたものになる。

登校してきた生徒はたださえ月曜日で気落ちしているために美潮を避けるようにして校門をくぐっていく。

「い、委員長。何してるんですか？みんな素通りしてますよ」

慌てた様子で少し離れた場所で荷物検査をしていた風紀委員が美潮のもとに駆け寄ってきた。

平和な顔をした普通の少年だ。彼もたしか誠司と同じ学年だっただろう。そのことがわかるだけに美潮はイラついた。

「わかってるわよ、悪かったわね！」

キッと駆け寄ってきた風紀委員を睨みつけて怒鳴り散らす。美潮自身もわかっているが、完全な八つ当たりだ。誠司が自分の誘いに

乗らないことは彼女自身もわかっている。それでも、同世代の中でも特異な彼が今自分のもとに駆け寄ってきた少年と同じ場所に埋もれようとしているのが美潮にはどうしても納得できなかった。

怒鳴られた風紀委員は怯えた様子で美潮から離れると、荷物検査を再開する。美潮も彼が荷物検査を再開したのを見届けると鬼気迫る表情で荷物検査を行うのだった。

月曜日の授業は面倒くさい。学生の大部分が背負う命題であろう。真面目な学生である誠司にとってもそれは同様であり、授業中に船をこぐ生徒も多くいる。しかし、誠司はそんな中にあっても退屈な授業を耐え抜いた。呪文のように公式を並べ、文学でもないのにXやらYやらを使う数学の授業も、日本から一步も外に出たことがなく、これから出ていく予定もないのに習う英語の授業も瞬き以外で目を閉じることなく耐え抜いた。

苦しくとも最大の難関はまだ過ぎていない。それは、眠気との戦いではない。午後の一発目の授業、昼食をとったすぐ後の授業。人それを体育と言う。

正直、眠気と戦い満身創痍で無理やり食事をとった直後に延々と走らされるのは鍛えられた体を誇る誠司であっても横っ腹が痛くなる。

ただでさえ最近はずっと疲れが取れないのだ。

「あ、やばい……」

倒れる。そう自覚した時には前のめりに倒れていた。

慌てた様子のクラスメイトや体育教師が駆け寄ってくるのを薄れ

ゆく意識の中で確認しながらもどこか他人事のように感じる。駆け寄ってきた体育教師やクラスメイトの顔がぼやけたかと思うと、誠司の意識は闇に包まれるのだった。

0-0 気を失うことを寝るとは言わない（後書き）

こっちが、後から掲載されるんですが私のメインストーリーはこっちら。

更新頻度的にはこっちが上になる予定ですので、ご了承ください。

0-1 夢の中で夢と気づくのはそうそうない

朝になり、リサはゆっくりと目を開いた。見上げるベッドの天幕は相も変わらず豪奢なものではあるのだが、正直必要性を感じさせなかった。

大きく口をあけながらあくびをするとベッドから降りてネグリジェを脱ぐ。いつの間にか側に仕えていたメイドたちはリサが何も言わなくとも彼女にドレスをそつなく着させていく。

ラ・フェリス王国第二王女リサ・ドニエス・ラ・フェリスは絢爛なドレスに身を包み、自室を後にした。さあ、今日も退屈な一日が始まる。

ラ・フェリス王国を表すのは一言で事足りる。平和な国だ。周辺諸国と争うこともなく、1000年以上の歴史を重ねている。

だからこそ、緩やかな腐敗の道を進んでおり、貴族院やラ・フェリスに拠点を置く商人たちの腐敗は目に余るものがある。だが、貴族たちの腐敗を分かっている、リサの父親である38代国王ジョシア・ケリス・ラ・フェリスはそんな腐敗を正そうとせずにいる。国の腐敗はだいたい25代国王のころから始まっているため一概にジョシアが悪いとは言えないが、国王となった後もそれを正そうとしない父の姿にリサは憤りを感じるほかなかった。

自分は第二王女だが、王位継承権は5位でしかない。兄や弟たちが国王となったときにどのような国政を敷くつもりかはわからないが、父はまだ45歳だ。王位を退くのもまだまだ先の話だろう。

国が滅ぶまでそれほど時間があるとは思えない。だからと言って、自らが王位を得るために革命を起こせば国民に多大な被害が及ぶだろうことから自分が革命を起こすわけにもいかずにリサは自分の無力さを痛感するほかにない。

「誰か、助けてよ……」

リサは王宮内にある聖モニカ像の前に膝き祈りをささげながら呟いた。

かつて、魔王を倒し世界を救ったとされる聖女の像は何も言わずにリサの姿を見下ろしている。慈愛に満ちた表情もリサには救いをもたらすことはない。

「誰か……助けて……」

リサの涙ながらのつぶやきは王宮内の広い廊下にむなしく吸い込まれていった。

•
•
•

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

誠司は蝸の鳴き声を半覚醒状態の意識の中で聞いた。自分は眠っていたのだろうとどこかで理解しながらも、瞼は一向にひらこうとしない。

ここはどこだろうか。意識を失う直前の記憶をたどると、体育の授業でランニング中に倒れたのだろうことは思い出した。

間違っても王宮の自室などで目を覚ましたということではなく、侍女に着換えさせたなんてことはありえない。あんな豪華なベッドで眠った経験もなければ侍女がいるような暮らしをしたことなんて一度としてない。

そもそも、あの体は女性のものだった。間違いなく誠司は男性であり、股間には立派かどうかはさておきモノもある。

徐々に体のほうも目覚めの体勢に入ってきたのか、妙に重たかった瞼がわずかに動く。

瞼が開かれ、視界に飛び込んできたのは見たことのない天井だった。

「ど、どこだここ……」

誠司は慌てて体を起こし、ぐると周囲に視線を走らせる。そこでようやく天井に見覚えがなかったことに納得いった。

今は開かれているがカーテンで仕切りができるようになったベッド回り、薬品の入った棚などがある。誠司には、この場所自体には見覚えがあった。

「保健室……か」

間違いなくこの場所は誠司の通う学園の保健室だ。

窓からはオレンジ色の光が差し込み、グラウンドからは運動部の掛け声が聞こえてこない。時計を見るよりも早くかなり遅い時間だと判断できた。

倒れたのが昼食直後の授業だったことを考えるとずいぶん長い時間気を失っていたことになる。

誠司はベッドから降りるとドアの向こうから人の気配が近づいてくることに気がついた。おそらくは養護教員と邦彦だろう。気配でわかる。

「おーっすマコっち、元気かあ？」

案の定保健室だというのにやかましく扉を開いた邦彦が中に入ってくる。ちらりと彼の後ろにいる養護教員に目を向けてみるとなんだか苦い顔をしていた。若い女性だし、下品な話でもされたのだろう。

誠司は心の中でご愁傷様ですと養護教員に手を合わせると、能天気な顔で歩み寄ってくる邦彦に向き直る。

「元気だったら、ここにはいないって」

「それもそうか、はっはっは」

一応というかそれなりに心配はしてくれていたのだろう。能気なフリをしていても邦彦という男はやさしい奴だ。

幼馴染に感謝の念を感じつつ、誠司は軽く体を動かして異常がないかを確認する。相変わらず眠ったというか気を失った割に体力は消耗しているが、異常はなさそうだ。

「先生、俺はこのまま帰っても大丈夫なんですか？」

「そうね、倒れたのは過労と寝不足が原因みたいだから家に戻ってゆっくり休むこと。若いからって夜更かしばかりしちゃダメよ」

眠ってるんですけどね、と口の中で言い訳しながら誠司は曖昧に苦笑した。

「にしても、ほんとに大丈夫なのか？」

「まあ、特に不調は感じられないから大丈夫だろ」

オレンジ色に染まる坂道を誠司と邦彦の二人は並んで歩く。下校時間まで余裕はあるが、授業が終わってからしばらくたっている。部活が終わるまでまだ時間があるので人通りはほとんどない。

「というか、お前はいつの間に登校したんだ？今朝は霧生さん見て逃げ出したのに」

「いやあ、3組の近藤にエロ本貸す約束しててな。荷物検査されるのはまずかったんだよ。で、体育かったるいから終わったくらいに学校きたらマコっちが倒れたって言うじゃん？ビビったよマジで」

「6時間目だけのために学校来たのか？どうせなら、風紀委員がいなくなったらすぐ来ればよかったじゃないか」

それならば、HRは欠席だがろうじて1時間目の授業には間に合うだろう。寝坊したりしても大体午前中の早いうちに登校してくる邦彦にしては午後の授業、それも6時間目一つだけのために学校に来るのは珍しいことだ。

そもそも、6時間目一つを受けるくらいならその日は欠席でも良

かったんじゃないだろうか。

「ん？ いやあ、家に帰って漫画読んでたら遅くなっちゃってな。休もうかと思っただけ、近藤が早く貸せてメールしてきたんだよ」

「ああ、なるほどね」

なんとも邦彦らしい理由だ。邦彦は一つのことに熱中しだす時間や食事などの一切を忘れたように没頭することがある。驚異的な集中力は話しかけるどころか軽くゆする程度ではまったく気付かないほどだ。

誠司は苦笑すると不意に目に入った教会の前で足を止めた。学校へと続く坂のふもとにある普通の教会だ。聖女モニカを祀っているわけでもない、キリスト様の像があったり、マリア様の像があったりするような普通の。

「どったの？」

誠司が立ち止まったことに気付かず邦彦は少し先にいったところであろうやく立ち止まり振り返った。

神妙な顔つきの誠司を不思議そうに見つめる。

「いや、なんでもない……」

誠司はかぶりを振ると邦彦を小走りで駆け寄る。きっとあれはただの夢だ。いつも見ているただの夢。

誠司は自分にそう言い聞かせるように心の中で繰り返した。

0-2 女性にアクセサリーを贈るときはよく考えるべきだ

ラ・フェリス王国 ヴェルンシュタイン城

ザルーズ・ベフマツト・ヴェルンシュタインは今の王政というものに納得がいていなかった。

ただ、王家に生まれた。ただ、長男だった。という理由だけで国のすべてを統べている王族という制度が納得がいかない。

貴族院で決められた制度を王が気まぐれに却下しただけで自分たち貴族に都合のいい法律が認められないことに納得がいかない。

自分が、ラ・フェリス王国建国当初から面々と続くヴェルンシュタイン家の当主であるこの自分が媚びへつらわなくてはいけない相手がいることに納得がいかない。

何もかも、王政を敷くこの国の制度がいけない。ザルーズはそう考えていた。

王は無能で、自分たち貴族がいなければなにもできない。ならば、自分たちがこの国の舵を取らなくてはいけない。それを邪魔する王などはないものだ。

いらいらとしながらザルーズはワインをあおった。

「忌々しい、何が国王だ」

空になったワイングラスを床にたたきつける。もともと薄いグラスは小気味いい音を立てて割れて破片が床に散らばった。

このまま放っておけば明日の朝には散らばった破片も一つ残らず片付けられていることだろう。ザルーズには何も言わずとも人にそれをやらせるだけの権力がある。

しかし、それも自分よりも立場が上の相手には通用しない。それがどうしても許し難い。

すでに夜の帳が落ちてからそれなりの時間が過ぎている。照明器具の発達していないこの世界では、部屋の中にはろうそくのわずかな明かりしかない。それゆえに部屋の大部分は明かりが届かず、人の気配を感じることも難しい。そんな部屋の隅に黒衣の男が立っていたところで普通の人間には分かるはずもないことだ。

「ベフマット様、一週間後に開かれる親国王派の会合にローゼン卿が参加できることになりました」

「ふん、そうか……」

突然声をかけられたにもかかわらず、ザルーズは驚いた様子も見せずおもしろくなさそうに言った。

そもそも今のこの国の状況で親国王派が存在することが面白くない。自分こそがこの国の中心となるべきなのにそれがわからない貴族が多すぎる。

「今回の会合には中立を保っていたシュウテム卿も参加するとのこと、卿が親国王派についたことは明白でしょう」

「ふん、シュウテム何ぞの田舎小僧に大した影響力もないわ。それよりもビュッテハイムはどうなった？」

「いまだ交渉の途中です。かのご老体はいささか難儀な性格をなさっているため難航しているとのことですよ」

「お前が直接乗り込めば話はすぐにつくのではないのか、イダーシユ？」

ザルーズは下卑た笑いを浮かべながらイダーシユと呼んだ黒衣の男の方を初めて見た。黒い布で頭と口元を隠しており、顔の中で唯一見える目は暗い部屋の中にあってもギラリと赤い瞳を輝かせている。全体的に小柄な印象を受ける、忍者のような格好をした男だ。

「いえ、わたし程度ではビュッテハイム卿はDoingすることもできません」

「ふん、冗談だ。ビュッテハイムのご老人はお前程度ではどうしようもない」

ザルーズは吐き捨てるように言う。と棚の中からグラスをひとつ取り出した。暗い部屋の中で注がれた赤いワインはどす黒い、どこまでも深い黒にしか見えない。

イダーシュはザルーズの次の言葉を待つように無言のままその場に立ち尽くす。

「まあいい。まだ時間はある。……それよりもまずはあのお転婆なお姫様が先だ」

「……そちらの準備は滞りなく済んでおります」

「万が一にも失敗は許されん。万全をきせ」

「っは」

イダーシュが闇に紛れるようにその姿を消すのを見届けると、ザルーズはグラスを置いた。

笑みを浮かべるだけで浮かび上がる無数の皺はろうそくの頼りない明かりを浴びてどこか恐ろしさまで感じさせるものだった。

ラ・フェリス王国 王宮

その日ラ・フェリス王国の王宮を騒がせる来客があった。魔法大

国で知られるグラゼオ王国六騎士が一人ミリアンド・クランテオがアポイントもなしに突如として訪れたからだ。

グラゼオとラ・フェリスは友好的な同盟を結んでおり、特別な手続きをしなくともお互いの国境をまたぐことは難しくないのだが、国の主要人物ともなれば要らぬ誤解を与えぬためにそれ相応の手順を踏むのが通例であった。しかし、ジョシユアは突然の来訪であったミリアンドとの謁見を許した。

国王ジョシユアがまだ王子であったころグラゼオに留学した際に親しくなったトリサは聞かされていた。六騎士と言えばグラゼオで魔法使いもしくは魔術師の中から各属性で最も優秀な人間に与えられる称号だ。そんな人間とさして特筆できる点もない凡王とも言われるジョシユアが親友であると聞かされても信じられるはずがない。しかし、ミリアンドは実際に王宮を訪れ、ジョシユアと親しげに会話をしていた。さすがに謁見の間では一国の王として接していたがミリアンドを会食に招いた際は一人の友人としてお互いに砕けた雰囲気で会話をしていたのだ。

会食を終え、自室に戻る途中でリサはミリアンドについて思い返す。

この国の腐敗した特権階級の人間とは違う本当に気高い高貴な人間というのが第一印象だった。言葉の節々に知性を感じさせ、物腰は穏やかで変に媚び諂うようなことはしない。他国にありながらも威風堂々とした様は同じ謁見の間で立ち並ぶラ・フェリスの貴族連中を完全に圧倒していた。

彼のような人間が他にまだ5人もいるのだ、さぞグラゼオは良い国なのだろう。リサは見たこともない国に思いを馳せるが羨んばかりもいられない。ラ・フェリスもあのような人間が国の重職につくそんな国を目指したいのだ。

だが、リサは王位を継承することもできないだろうし、ミリアンドがラ・フェリスの人間になってくれるわけでもない。

リサは自分が理想としていることに対してあまりに無力なことに

ため息をつくしかなかった。

「ドニエス王女、どうかなさいましたか？」

誰もいないと思っていた廊下でリサを呼び止めたのは件のミリアンドであった。

音もなく、まるで暗殺者かのような登場のしかただが、敵意はないのだろう。グラゼオの六騎士ということは大陸で一番の使い手であるといっても過言ではない。しかもミリアンドは界の魔法使いだ。空間をゆがめテレポートなどが初歩魔法として扱われている系統で、界の魔法か魔術を扱えるものの多くは暗殺者を生業としている。つまり彼は大陸で一番優秀な暗殺者ともいえる。

そんなミリアンドであれば王宮内で油断していたリサを誰にも気づかれずに暗殺することなどたやすい。それでも声をかけたということは彼にその意思がないという証拠だろう。

「他の者はいません、リサで結構ですわ克蘭テオ卿」

足を止めミリアンドに向き直りながらリサは言った。

改めて見るとミリアンドはジョシユアと同じ年とは思えないほどに若々しい顔つきをしている。張りのある肌は二十代どころか十代と言っても通用するだろう。女性でもうらやむような手入れの生きた金色の髪、深い知性を感じさせる碧の瞳。彼にまっすぐと見つめられれば、免疫のない女性であれば思わず赤面してしまうだろう。

しかしながらリサにとっては彼の実年齢を知っている上に無駄に顔だけはいい貴族連中から言い寄られているためにある程度美男子に免疫ができている。不意を突かれでもしない限り赤面するようなこともないだろう。

「ならば私もミリアンドで結構ですよ、リサ様」

そう言ってほほ笑む姿も嫌味を感じさせない。彼であれば気障だったらしいセリフであっても劇中の出来事のように様になるだろう、同年代の男性であれば婿の候補に挙げてても問題ないと思わせるほどにリサは彼のことを嫌っていない。

「では、ミリアンド様。何か私に御用があったんではないですか？」

「ええ……ジョシユアからも聞いていましたが、どうもリサ様は危ういと思わされてね」

「私が危うい？」

思わず聞き返したりリサの言葉に真剣な表情のミリアンドはうなづいて見せた。

「国を憂い、さまざまな事柄に思いを巡らせる姿は王族として正しい姿と言えます。しかし、あなたは王女であり王ではない。そんなあなたを疎ましく思う人間は多くいることでしょう」

リサはミリアンドの言葉を笑い飛ばすことはできなかった。王宮に通い詰める貴族や商人が自分をどのように思っているかはよく理解している。少なくとも好意を抱いていることはありえない。中にはあからさまなまでにリサを疎ましい目で見る者もいるほどだ。いつ刺客が差し向けられるのか、そんな不安さえ抱いている。

一国の王女、それも自国の王女に対して刺客を送り込むということとは相応の準備と覚悟が必要となる。万が一にも失敗した場合どのような目にあうのかは想像に難くない。

「確かにミリアンド様のおっしゃる通りですね」

さらに不幸なことはリサの従者に武芸に秀でた者はいない。最低限の武術は収めていても常に側にいるような従者の中に一流の暗殺者から彼女の身を守るだけの實力を持った人間はいない。さすがに他国を訪問する際には護衛を連れて行くが、ラ・フェリスの中では常に護衛を連れているわけではない。

「ジョシユアからもリサ様のことを守るいい方法はないかと相談されましたね。私なりにそれに応えさせていただくことにしました」

言いながらミリアンドは懷から宝石の付いたブレスレッドを取り出した。一見して安物にも見えるが、装飾は嫌味にならない程度に為されており全体的に上品な造りをしている。見るものが見ればその価値を見いだせるそのブレスレッドにはミリアンドの瞳と同じ深い碧の宝石が埋め込まれている。

「これは？」

リサは差し出されたブレスレッドとミリアンドを交互に見やった。

「私の魔力を結晶化させたものをブレスレッドとして仕立てたものです。どうぞ、お受け取りください」

おずおずとブレスレッドを受け取ったリサは埋め込まれている碧の宝石をまじまじと見つめた。よくよく目を凝らしてみれば界の紋章が宝石の中に封じ込まれていることがわかる。

「これを身につけ祝詞を唱えれば紋章が発動します。実際に力を使っていないので正確な威力はわかりませんがホワイトドラゴンぐらいは呼び出せる力を込めてあります」

リサはミリアンドの言葉に思わずブレスレッドを取り落としそうになった。

軽く言ったがホワイトドラゴンと言えば人語を解し1000年の時を生きるとされる竜で、竜族の中でもカオス、ブラックに次ぐ三番目に強大な力を持つ竜としてあまりにも有名だ。

単なるドラゴンの討伐ですら100人の騎士を必要とするが、ホワイトドラゴンであれば一国の軍事力に相当する戦力を投入しなければ倒すことはできないだろう。

「私が使ってしまうと、問答無用で所有権が私のものになってしまうので、あなたには扱うことができなくなってしまいます。ですので、一国の姫君に献上する品としてはお恥ずかしい限りですが、ぶっつけ本番ということでは」

「いえ、恥ずかしいことなど何ありません。このような品を私のような小娘に下さるのです、心から感謝を送らせていただきます」
「そう言っていただけなら幸いです。友からの願いを叶えることができて私としてもホッとしてました」

そう言って微笑んだミリアンドを見た時、リサは初めて彼が父と同年代だと思えた。若々しい見た目の割に落ち着いた雰囲気醸す彼だが、やはり年かさを計るのに見た目のほうが上回ってしまう。しかし今、彼の浮かべるその笑みは慈愛に溢れるどこか老いを感じさせる笑みだったからだ。

「夜も更けてまいりました。私はこれにて失礼させていただきます」
「本当にありがとうございますミリアンド様」

背を向けるミリアンドに謝辞を述べながらリサは優雅な礼をする。

「リサ様、あなたに聖女モニカに加護があらんことを」

最後にそう言い残してミリアンドはその姿をリサの前から消した。界の魔法による転移だ。一瞬で消えるようになくなったミリアンドがこの場にいないことがわかるとリサは改めてブレスレットをまじまじと見る。

ホワイトドラゴンは力もさることながらその体も巨大な竜だ。間違っても王宮の中で召喚するわけにはいかないだろう。

「試すのは明日ね」

リサはぽつりとそう零すと誰もいなくなった廊下を自室へ向けて歩きだすのだった。

これから起きる様々な事件のことをこのときのリサは何一つ知らない。知る由のないことだった。

0-3 実際に襲われると足がすくむものだ

日本 誠司自宅

その日、誠司は久しぶりに清々しい朝を迎えた。

いつも見ていた夢を見ることなく、体の疲れは十分に取れている。頭はすっきりとしていて、昨日倒れたことがうそのようだ。カーテンを開けて高く上った太陽の光を一身に浴びながら誠司は深呼吸をした。

制服に着替えながら何気なく時計に目を向けるともうそろそろ12時だ。十分な睡眠がとれた。

「は？」

思わず誠司は間拔けな声を漏らしながら時計をもう一度見た。たしかに短針は12に差し掛かり、長針もそれに近づきつつある。日曜日でもない普通の平日の今日は学校がある、ということは間違いなくというか完全に遅刻だ。

慌てて部屋着を脱ぎ捨てて制服への着替えを終えるとカバンをひつつかんで部屋を飛び出る。

「あら、誠司起きたの？」

「起きたの？ じゃないよ。なんで起こしてくれないのさ」

リビングの前を通ったところで母親、御堂 有紀に呼び止められ誠司は足を止めた。掃除や洗濯といった一通りの家事を終えてこれから昼食を作るのだらう。椅子に腰かけ茶をすすっている有紀に誠司は非難を浴びせる。

「何度声かけても起きなかったのはあんたじゃない。今日はサボるのかと思ったわ」

「息子が学校サボろうとしたら無理やりにも行かせようとしろよ」
「あんたが決めたなら、学校サボろうが何しようがあんたの勝手でしょう。人様に迷惑かけないんだったら全部自己責任よ」

放任主義、そんな言葉が誠司の頭を過る。有紀だけでなく父親も育児に関しては同意見なのだろう。誠司が決めたことで他人の迷惑にならないことなら一度として両親は反対したことがない。普段はそんな両親に感謝し、嬉しく思うのだが今日ばかりは状況が違う。

「ああ、もうわかったよ。今日はただの寝坊だから学校行く。いつてきます」

「はいはい、車に気をつけんのよ」

「そんなこと子供じゃないんだから分かってるよ」

この時、誠司も有紀も知らない。気をつけるべきは車などではないことを。

そしてこの日、誠司は両親が戒める人様に迷惑をかけることになることも。

ラ・フェリス王国 ヴェルンシュタイン城

ザルーズは執務机の上に束ねられた書類に目を通しながらも日の高さを気にしていた。時刻の概念はあるが時計は存在しない世界で

は時間の経過は多くの場合日の高さによって決められる。

今日は例の計画の一部が実行に移される日だ。日が一番高い場所に昇るとき、王宮において手勢の一部が行動を起こす手筈になっている。これから国を乗っ取る上で一番の障害となりえる相手、リサを暗殺するための計画。

リサさえいなければこの国の王族には平凡な王と間拔けな王子、政治に関心のない姫しか残らない。実際、貴族の利を害する政策はリサの進言で薦められたもの以外はここ数十年一つとしてなかったことだ。彼女さえいなければ不満を解決することも容易くなるだろう。

ザルーズは吉報を待ちながら書類を片付けて行く。日は徐々に一番高い場所に昇りつつあった。

ラ・フェリス王国 王宮 中庭

ミリアンドからブレスレッドを受け取った翌日、リサは中庭へと赴いた。昨晚の内に召喚魔法を試しておきたかったが、それはさすがに思いとどまった。ミリアンドが言っていた通り、このブレスレッドを利用してホワイトドラゴンを召喚することになったらまずいことになるのが容易に想像できたからだ。

ホワイトドラゴンと言えば頭から尾まで50メートルにおよび、その首を起せば20メートルもの高さになる。翼を広げればさながら巨大な壁を連想させ、尾を振るえば巨木が易々となぎ倒される。万が一にもそんなものを城内で召喚すれば王宮内は大惨事に見舞われることだろう。

未だ見たことのないホワイトドラゴンの姿を想像しリサは深呼吸

をする。紋章を封じ魔力が込められた魔法石があればなんの力も持たない人間でもまず失敗することはないだろうが、何が起きても対応できるように心の準備を怠るわけにはいかない。

「さあ……いくわよ」

リサはキツと目に力を込めるとブレスレッドをはめた腕をまっすぐと前に伸ばす。このまま祝詞を唱えれば魔法石の力に見合った力を持つなにかが召喚される。初めての体験にリサは胸の動悸が早まるのを感じた。

ラ・フェリスの伝統では紋章を持って生れなかった王族は紋章を彫ることが認められない。王族は生まれながらの資質によってその責務を果たすことこそが正しいとされていたからだ。先天的な魔法使いでなければ、後天的に魔法を用いる魔術師になることはできない。つまり生まれながらに魔法を使えない場合はその生涯を通じて魔法を使うことができないラ・フェリスの王族の中で魔法使いでないのに魔法を使うのは自分が初めてではないだろうか。そんな考えもリサの気持ちを高ぶらせた。

リサの周りの空気がピンと張り詰める。浅い呼吸を繰り返し祝詞を唱えようとしたところでリサは微妙な空間の揺らぎを感じ取った。

「っ！」

即座にその場を飛び退くと同時にヒュンと何かが一瞬前までリサのいた場所を通り抜けた。

「おいおい、なんで今のを避けられるんだ？」

リサが見つめる先、ほんの一瞬前まで自分が立っていた場所のすぐそこにその男はそこに立っていた。左手に持ったナイフを弄んで

いるがそれ以上にリサの目を惹いたのは腕に掘り込まれた界の紋章だった。

暗殺者。

リサは頭にその言葉が過ると同時に駆けだしていた。

王宮の周りには魔法を遮断する細工が施されているため外から直接この場所に転移することはかなわない。それは大陸一とも言われるミリアンドにも不可能なことだ。ならば王宮内まで何者かが手引きしたと考えるのが妥当だろう。

王宮の中に逃げ込めばさらに状況が悪くなるかもしれない。とっさにそう判断したりリサは中庭からつながる森の中に逃げ込んだ。

界の魔法とはいえ瞬時に転移したり人を目標として転移できるのはミリアンドくらいのものだ。どれだけ凄腕の暗殺者でもなかなかできることではないはず。そう考えているリサの予想は間違っていない。

転移は移動先の風景を想像するか、ある程度の方角と距離をイメージして行うものだ。ミリアンドであればそれらと詠唱を同時に行い5秒もかからずにやってのけるだろうが、ただでさえ界の魔法は稀少で師事できる人間も少ない。それだけの技量を獲得するには天才と言われるミリアンドでも40年に及ぶ修行を要した。加えて言うなら紋章の大きさがその人間の扱える魔法の大きさだ。普段は隠されているが全身に紋章が宿されたミリアンドに対してこの暗殺者は腕の一部にしか紋章が浮かんでいない。

暗殺者で界の魔法を使えるというのはそれだけで一流と呼ばれる場合が多いが、それは最初の一撃で相手を仕留めることが前提とされていることだ。今回のように初撃を避けられた場合、界の魔法はほとんど役に立たない。

「うち、話の通りお転婆なお姫様だな」

暗殺者は舌打ちしながらリサの後を追う。

中庭での出来事を察知した王宮内で待ち構えていた暗殺者も即座に飛び出し界の紋章を持った暗殺者に続くようにして駆けだしていた。

広大な王宮の敷地の中で中庭から続く森は下手に迷えば一週間出られないどころの話では済まない程度の広さはある。幼いころから王宮で育ったりサにとってもそれは当てはまることだが、そんな心配をしている場合ではない。

息を切らせながら走り続けるリサの周りを何度も矢が通る。いつの間にか追っ手の数が増えていることに気付いたが、追っ手の中にリサの味方が居てもしない限り絶体絶命のピンチであることに変わりはない。少なくとも暗殺者の中にリサの従者が混ざっている様子はなさそうだ。

特別手を入れられていない森の中には道らしい道も存在しない。無理矢理藪を通り抜けるたびにドレスは裂け、体中に痛みが走る。それでも足を止めるわけにいかずリサは無我夢中で走り続けた。

「つきゃ」

逃げ続けている限り距離が縮まることもなくなんとか打開策を考えようとしていたりサだが何かに足を取られ前のめりに倒れこんだ。倒れたまま後ろに目を向けてみれば、無情にも一際大きな木の根が地面から飛び出している。あれに足を取られたのだろう。

早く逃げなくては。

立ち上がろうとするリサだがひねったのか右足に痛みが走る。暗殺者たちは好機とばかりにリサとの距離を一気に詰めようと足を速めた。

「もう逃げないのかいお姫様？」

界の紋章をもった暗殺者がにやにやと笑みを浮かべながらリサの前に立つ。右手には鋭いナイフを無造作に握っている。

界の暗殺者からは少し距離を開けたところ、木々の間に他の暗殺者たちの姿も見える。もう後がないところまで追い込まれたことを理解してリサは歯噛みする。

絶対の窮地。

リサは覚悟を決めてブレスレッドをはめた手を固く握りしめた。そして静かに目を閉じる。

「なんだよ、もう降参か？諦めの早いこったな」

界の暗殺者の言う通りその姿は諦めて自らの死を受け入れようとしている姿にも見える。しかしリサはそんな暗殺者の言葉も意識の外に追いやり言葉を紡ぎ始める。

『我望むる、我呼びつる、我欲する………』

「おいおい、何をぶつぶつ言ってるんだ？聖女モニカにでもお祈りしてるのか？」

小さく言葉を紡ぐリサの声は界の暗殺者に届いておらず、何かをぶつぶつと言っているようにしか見えない。

ナイフを握りなおすと暗殺者は一步一步近づいていく。彼にとって目の前の少女は単なる獲物でしかない。猫に壁の隅までおいやられたネズミのようにこの少女は痛ぶられて殺されることしかできない存在だ。

最後のお祈りぐらいはやらせてやろう、そんな驕りを界の暗殺者はすぐに後悔することになった。

『汝は気高き者、汝は強き者、汝は奮いし者……』

リサの祝詞に反応するように碧の宝石が光を放ち始め、宝石内の紋章が徐々にその力を強くしていく。

「っな！？コントラクトの祝詞！？契約魔法だと！」

リサとの距離が近くなりその言葉の意味を理解した界の暗殺者の背中を冷たいものが走る。リサのつけているブレスレッドから溢れる魔力が召喚しようとしている相手の強大さを物語っている。

（この土壇場で契約する気か？こんな状況で呼び出せば、下手すりや自分も食われるぞ）

召喚の魔法は召喚して即座にその力を使役できるわけではない。

召喚した獣と契約を交わしそれによって初めてその力を行使できるのだ。召喚した相手が同意しなければ最初からやり直せば済む話だが、今回は状況が特殊だ。

召喚魔法を使う場合、普通は周囲に人がいない状況を選ぶのが通例である。それは召喚した相手が高位の存在であればあるほど気難しく気位が高いため下手に刺激すれば召喚魔法を行使した人間も襲われる危険があるためだ。低級の獣であればそんな心配はないのだが、リサが紡ぐ祝詞と召喚の媒体であるブレスレッドの魔力は完全に超上級の相手を召喚するためのものだ。こんな殺気と争いの空気の中で召喚すれば周囲の人間は軒並み獣の腹の中に収められることだろう。

「手前ら、矢だ！お姫様を射殺せ！」

界の暗殺者は動向を見守っていた周囲の暗殺者たちにむけて叫んだ。突然のことに事態のわからない暗殺者たちは互いに顔を見合わせてどうしたものかとその動きを止める。

指示を出すのと同時に自らはリサの召喚を邪魔するために紋章を発動させる。魔法石の力に比べて界の暗殺者の紋章の力は微々たるものだが何もしないよりはましだ。別の場所の相手を召喚するため空間をゆがめていたその場所をさらに界の暗殺者の魔法がより歪に形を変えさせる。

界の暗殺者の切羽詰まった様相に事態の深刻さに気付いた暗殺者たちが慌てて弓に矢を番える。しかし慌てて放たれた矢は狙いも定められず見当違いの方向へと飛んでいく。

「つきゃ！」

たまたま一本の矢がリサの頬を裂いた。思わず祝詞を止めてしまいうりサだがもはや紋章は止まることなく力を加速させていく。

『……サモン！』

魔法がもはやどうしようもないところまで来ているのを感じ取ったりサは最後の3小節を飛ばして魔法を完成させた。彼女の行いはこの場合正しい。もしも途中で途切れた祝詞を再び紡いでいればそれこそ爆発なりが起こっていたはずだが、リサの本能によってその事態は回避された。

しかし、祝詞を最後まで続けなかったこと自体がすでに魔法を歪な形としている。さらに界の暗殺者が魔法に影響を与えているのがリサの召喚を予想外の方法に加速させる。

リサには何が起きているのかわからない。何が起きるのかもわからない。

起死回生の一手を投じるために放った最後の手段はリサの世界を

白く染め上げるのだった。

0-4 人によって普通という言葉の物差しは違うものだ

日本 通学路

時刻は12時を回り穏やかな空気が住宅街には満ちている。専業主婦の皆さんは自分だけが食べるのだからと適当に作った昼食をつきながら娯楽番組に現を抜かしている。というのはさすがに偏見だろうが、そんな住宅街を誠司はのんびりと歩いていた。

学校ではもう間もなく4時間目の授業も終わり昼休みに入ろうかという時間だ。家を出た直後は忙しく動かされていた両足も、もはや遅刻はどうしようもないので5時間目に間に合えば問題ないだろうとゆったりと前後する。

普段寝坊なんてしたことのない誠司にとって平日の昼間から住宅街を歩くというのははじめてに等しいことだった。開校記念日とかであったなら多少気分も違うのだろうが、学校ではクラスメイト達が授業を受けているのかと思うと少しばかり申し訳ないと思う。それと同時にどこかわくわくしているのも確かだった。

当然のことながら制服姿で歩いている学生は一人もいない。というか、誠司以外には人がいない。

だからだろう、それが信じられない速さで走っていたのは。

誠司が腕時計に目を落とすと5時間目まであと15分ほどの時間になっていた。だから誠司はのんびりとしていた足取りを急に早めた。

住宅街の十字路は得てして視界が悪いのも影響していた。

二人でそれに乗っていた男たちが少しの間顔を向け合い話をしていたのも影響していた。

イヤホンを耳につけ音量を少し大きくしていたのも影響していた。不幸な影響が連鎖してその事態は起きた。

「え？」

視界の隅に何か動くものを捉えた誠司は足を止めそちらに目を向けた。向けてしまった。

迫りくるトラック。その巨大さと速さに誠司は身がすくみ動くことができなかった。

すべてはいくつもの不幸が影響した結果でしかない。そしてなによりも不幸であったのはこことは違うどこか別の世界。その場所で一人の少女が窮地に立たされているのがいけなかったのだろう。

トラックの運転手たちが事態に気づいた時にはもう遅い。慌ててブレーキを踏みながらハンドルを切ってもはや後の祭りだ。

トラックは閑静な住宅街の壁に激突し乗っていた二人の男性は気を失った。

突如家の壁を破壊され慌てた家主が救急車と警察を呼んだが、それらが到着したのはそれから12分後のことだった。病院にトラックに乗っていた二人が搬送される。

そう、二人だけが。

ラ・フェリス 王宮内の森

あたりを埋め尽くした光が収まるったときの変化は拍子抜けするほどあっさりとしたものだった。

今までそこにいなかった一人の青年が立っている、それだけのものだ。

見たことのない服を着ている青年はぐると周囲を見回している。

あまりに呆気ないものだったのでリサ自身にも何が起きたのか少しばかり理解が追い付かない。

今までこの場にいなかったのは彼以外にいない。つまり自分が召喚したのは人間。まったくもって信じられなかった。召喚魔法を用いて人を召喚するなど聞いたことがない。

「おいおい、何やってるんだ？お姫様が召喚するのは俺みたいな下賤な者とはまったくもって違いますなあ」

界の暗殺者はリサが召喚した青年を指差しながら腹を抱えて笑っている。人間を召喚するなど界の魔法を扱う人間からしても普通あり得ないことなのだろう。

キョロキョロとあたりを見回していた青年は界の暗殺者の声に反応してリサの方に目を向けた。今の今までリサがいたことに気が付いていなかったのだろうその表情はなにか驚いているように見える。

「あの、ここってどこ？」

緊迫した空気の中青年の声はひどく間抜けなものに感じられた。突然召喚されて事態が飲み込めていないのだろう。そもそも今の状況が召喚を行うものとして異例なのだからそれかもしれない。

「くくく……ほんとに間抜けな人間を召喚したみたいだな」

界の暗殺者は青年の様子を無視してナイフを構えなおす。陽光を受けてきらりと光る刃にリサの背筋を冷たくなる。

青年もさすがにナイフを見て表情を変えた。状況がわからないなりに緊迫したものを感じ取ったのだろう。しかし武器らしい武器も持っていない青年は構えをとる様子も見られない。

「おとなしく死ぬんだなお姫さまよお！」

懸念のなくなった界の暗殺者は駆けだすと同時にナイフを振りかぶる。凶刃が振り下ろされそうになるのを見てリサは身を固くした。しかし、いつまでたってもその刃はリサの身に届かない。

リサにはその光景が全く信じられず、また理解ができなかった。青年が界の暗殺者の腕を掴んだかと思うと界の暗殺者のみが宙を舞う。本人も自分がどのような状態にあるのか理解できないのだろう、一瞬のことではあるがその表情は今まさにリサに刃を突き立てようとしたときのままだ。

「ぐえっ！」

したたかに背中を打ち付けた界の暗殺者は車にひかれた蛙のようにその身を広げ、カエルのような声を上げた。

「え、っと……なんだかわからないけど刃物を持って女の子に襲いかかるのはどうかと思うぞ」

周囲が呆然とする中、リサを守ったらしい青年は界の暗殺者の腕を掴んだまま言った。

その場にいる人間の誰もが状況を理解できずに目を点にしたまま青年に視線を集める。やはりというか青年自身も状況が理解できていないままポリポリと頬をかいている。

「て、てめえ……」

界の暗殺者は青年の手を払うと慌てて距離をとる。青年が何かしらの技で界の暗殺者を倒れさせたのだろう。もしかしたら何かの魔法なのかもしれない。

青年は困った様子でリサの方へ顔を向けた。

「あのさ、今どういう状況なのかな？まったく理解できないんだけど」

青年の気がリサに向いているのを好機と見たのか界の暗殺者が襲いかかる。それを援護するように他の暗殺者たちも一斉に矢を放たれた。しかし、そんな攻撃の一切が青年の身に傷を負わせることすらできなかった。

まず、青年の足が側頭部をとらえ界の暗殺者は糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。そして放たれた矢の方も青年に当たる軌道をたどっていたものごとくが青年の手の中に収まっている。

リサにとってその光景は異質なものの以外の何物でもなかった。時間加速の魔法でも使ったのだろうか？しかも詠唱なしに。そんなことはあり得ないことだ。

「あなた何者？」

矢を放り捨てる青年はリサの声に再び顔を向けた。

「何者って……俺は誠司、御堂 誠司。普通の高校に通う二年生だ」
「セイジ・ミドウ・セイジ……コーコー？二年制？」

今迄に聞いたことのない言葉だ。それにセイジというのも聞いたことのない珍しい名前だ。詠唱なしの時間加速魔法やらが使えるようなレベルの魔法使い、魔術師であれば異国の人間でも名前ぐらい聞いたことがあるはずだがセイジなどという人間の話は一度として聞いたことがない。

「で、君の名前は？」

「私の名前はリサ・ドニエス・ラ・フェリス。ラ・フェリス王国第二王女よ。君なんて軽々しく言わないで、それにあなた頭が高いわ」

リサの名乗り（主に最後の一言）を聞いて誠司は国民的に知られている時代劇を思い出した。ここは「ははっ」と言いながら土下座をしないといけないのだろうか？それにしてお供の二人の姿が見当たらない。

まさか自分が今上段蹴りを喰らわして昏倒している相手が二人のうちのどちらかということはないだろう。さすがにご老公に切りかかることは助の字にしても角の字にしてもないはずだ。

そんな見当違いのことを考えている誠司を他所に暗殺者たちは再び矢を放ったが、すでに臨戦態勢に入っている誠司がそんな見え見えの殺気を放ちながら矢を射たところで気づかないはずがない。リサに背を向けた誠司は向かってくる矢のことごとくを打ち払って行く。

「ちょっと、あいつらも早くやつつけなさいよ」

「いや、距離があるからどうしようもないんだよね」

「さっきから加速魔法使ってるじゃない。あんた魔法使いでしょなんとかしなさいよ」

「なんだよその加速魔法って……俺は魔法なんて便利なもん使えないって」

そもそも魔法などと言われてもそんなものが存在するとは思えない。さすがにここが自分のいた場所とは違うということは誠司も気づいている。漫画や小説で似たような話も聞いたことがある。だが、異世界の常識とやらが一から十までわかるわけでも、理論も何も知らない魔法が突然使えるようになるわけでもない。

打ち払った矢の数も3桁に近づき、いい加減疲れも増して制服の

ところどころに切れ目が入ってきた頃になってようやく断続的に飛んできていた矢が止まった。殺気が遠ざかって行くところを見ると矢が尽きたのだろう。

「どうしたの……」

「矢が尽きたみたいだな。逃げてったよ」

突然の事態の変化に恐る恐る尋ねたりサは誠司の言葉を聞いて、ホッとしたのか強張らせていた肩から力が抜いた。矢は飛んでこなくなっただが、だからと言って誠司は気を抜くことができなかった。

そろそろ最初に気を失った界の暗殺者が目を覚ますころだ。また襲いかかられたらたまったものじゃないのでどうにかする必要がある。

「あのさ、ロープとかある？」

「ロープ？そんなの持っていないわよ」

「あ、マジで？どうしよっかなあ」

しょうがないと一人で納得した誠司は制服の上着を脱いで簡単にはあるが界の暗殺者を縛りつける。さすがに胴を回すことはできないので後ろ手に回した腕を固定するだけのものではあるが何もしないよりはましだろう。

「ちょっと、そんなことしても無駄よ。左腕を見ればわかるでしょ？」

「左腕？」

リサに言われて腕を見るが入れ墨らしいものが彫られている以外に特に何もない。ナイフはすでに没収しているのでナイフを使われ

る心配もないし他に武器を持っている様子もない。

「なにかあるの？」

「あなた本気で言っているの？界の紋章が彫られているじゃない」「貝の紋章？」

それはなにか、貝のようになるのだろうか。そう言えば昔私は貝になりたいというドラマだかがあったなあとやはり見当違いのことを考える誠司である。

紋章などと言われてもそんなものの存在を知らない誠司からすればわかるはずがないことだ。

「界の紋章っていったら基礎呪文は転移の呪文でしょ？そんなちゃんな拘束する暇があったら魔法で拘束しなさいよ」

「だから俺は魔法なんて使えないって」「嘘言わないで、さっき一瞬でそいつを飛ばしたり加速魔法で矢を払ってたじゃない」

「いや普通に腕取って投げただけだろ？あんなもん柔術やってれば普通にできるって。それに矢を払ったのも回し受けとか普通の受け技で払いのけてただけだし」

リサには誠司の言っていることの半分も理解できなかった。実際のところ誠司にとっての普通というものも一般的ではないのだが、それ以上に問題なのは誠司の使う技がリサのまったく知らないものであるという点だ。

柔術？回し受け？それはいったいどのようなものなのか知らないリサにとって、誠司の技は魔法としか捉えようのないものだった。

「そもそも紋章とか魔法とか言われたってそんなもん何も知らないんだからわかんねえよ」

「魔法を知らない！？あなた一体どこの田舎者？」

誠司の言葉に信じられないといった様子でリサは言った。その言葉は魔法を知らないという無知に対する侮蔑や嘲笑というよりも単純に驚きによるものだ。

今の時代、魔法は全能でないにしろ限りなく生活に密着している。街灯は火の魔法がかけられ、建築関係には土の魔法が用いられる。その他もろもろ数え上げればきりが無い。

「田舎者も何も俺のいたところには魔法なんてなかったよ。そもそもこいつが魔法を使えるのか？」

誠司は魔法なんて便利なものを使えるはずの男を胡散臭そうに見下ろした。なんの工夫もなく突っ込んで来たかと思えばたったの一撃で気を失ってしまったのだ。

もそもぞ動きだしたところをみるとそろそろ目を覚ますだろうか、そうしたら魔法の一つでも見せてほしいものだ。

「だから……いや、魔法を知らないならしょうがないのか……」

興奮気味のリサは一つ呼吸を置いて気を落ち着けるとひとりごちる。魔法を知らない人間が魔法使いや魔術師を見分けられるかと言えど否だろう。ならば、それを説明しなければわかるはずもない。

「その男の腕にあるのが界の紋章。その紋章を体に宿している人間は界の魔法を使えるの」

「貝の魔法？」

「たぶんそれは字が違うわ」

はあ、とため息をついて頭に手を当てる。この男は無知で馬鹿な

のかもしれない。なぜホワイトドラゴンを召喚できる魔法石でこんな人間を召喚してしまったのかと思うと頭がひどく痛い。

「界の魔法は世界に影響を与える魔法よ。空間をゆがめ転移をしたり結界を作ることができるのはこの魔法。さすがに結界はあなたのいた場所にもあるでしょ？」

「いや、ないけど」

「はあ！？だって神殿や教会の立ち入り禁止区域は結界が張られているはずよ。それともあなたはいい年して歴史も知らないの？」

「だから俺と君じゃ、そもそもの根本が違うんだよ。たぶん……いや絶対俺はこの世界の人間じゃない」

誠司の言葉に何度目かわからないがまたもリサは目を点にした。

この世界の人間じゃないとはどういう意味だろうか。

異世界という概念がリサの頭の中には存在していないため、リサの中では誠司は遠く離れた異国の人間程度の認識でしかなかった。確かに見慣れない服装ではあるが自分の知らない技術で織られたものだろう。確かに見慣れない技だったが、自分の知らない魔法だろう。そうとしか思っていなかったのに突然この世界などと分からない言葉を投げかけられてもどうしようもない。

「この世界じゃないっていったい……」

「だから異世界だよ。俺がいたのは地球の日本、ここは全然違うんだろ？俺のいた世界じゃラ・フェリスなんて国は地球のどこ探したってないんだよ」

「ラ・フェリスがないなんてそんな「それは、ずいぶん興味深い話だね」

リサの言葉を遮ったのは誠司ではない。ついでに言えばまだ朦朧とした様子の界の暗殺者でもない。今の今までその場所にはいなか

ったはずの人間がその場にはいつの間にか現れていたのだ。
妙にきらびやかなローブをまとった男、ミリアンドが誠司の後ろに立っていた。

「リサ様、いささか問題はあったようですが、無事に召喚に成功したようで安心しました」

「ミリアンド様どうしてここに？……いえ、それよりもあの魔法石で召喚できるのはホワイトドラゴンだったはずでは？なぜこのような男が召喚されたのですか？そもそも人間を召喚するなど聞いたことがありません」

「ははは、そんなにいっぺんに聞かれても答えられませんよ」

詰め寄ってくるリサに苦笑しながらミリアンドは誠司にちらりと目を向ける。

その瞬間誠司は思わず構えていた。目の前の男と戦ってはいけない、そんなことが本能的に理解できた。

「魔法石が発動したのを感じ取ったので様子を見に来させていただきました」

0-4 人によって普通という言葉の物差しは違うものだ（後書き）

ようやく誠司君が異世界へやってまいりました。

ちなみに彼、空手・柔術・剣術・中国拳法の天才です。というか、身体能力全般が常人の域を逸脱しているため段位などは基本的に持ち合わせていませんがまさしく人間の枠を逸脱したチートという設定があります。よって彼の普通はできる発言は一般人には理解できないものということをお願いします。そのうち話が進んだらキャラ説のページも書かせていただきますので詳しくはその時に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636u/>

放課後は召喚獣（仮）

2011年11月16日02時32分発行